大森地区優秀作文

社会を変える税

大田区立馬込東中学校　三年　　石田　凛

私の家族の関係が変化したのは、二〇二〇年一〇月のことだ。私が生まれた時も、今年小四の弟が生まれた時も、四年前に妹が生まれた時もたばこをやめようとしたけれど、どうしてもやめられなかった父が禁煙した。たばこ税の増税により、一箱の値段が五〇〇円を超えたことがきっかけだった。

休日には何度もベランダに出てたばこを吸い、においがついてくるため、私も含めて、弟も妹も父の近くに寄らなかった。「パパくさいから嫌だ」という言葉が妹の口癖になるほどだった。今では妹はテレビを見る時、必ず父の膝に乗っている。

一日一箱吸っていたため、月一万円浮く。父はこのお金を使って、毎年旅行に行くことを宣言し、一昨年は千葉、去年は熱海で家族一緒に過ごすことが出来た。家族の絆は格段に深まった。

たばこ税の増税は一九九八年に始まり、二〇一八年からは毎年実施されている。たばこは体にとても悪い。受動喫煙によって周りにも悪影響を及ぼす。増税を受けて喫煙者が減るのは良い傾向だ。喫煙者が減っているのに、たばこ税の税収は毎年、二兆円程度を維持しているという。教育や福祉、暮らしに関することに使われているそうだ。それを知ると、禁煙前の父を全否定することもできない。

税金って、正直真剣に考えたことがなかった。でも、私の家族が変わったように、税には社会を変える力があるのかもしれないと思うようになった。ただ、社会を変えるには、たばこ税のような特定の人にかかる税では足りない。多くの人が負担する税であれば、それだけ大きく物事を変える可能性がある。よい方向に社会が変わると説明され、多くの人が納得すれば、積極的に税を納める人も増えるのではないか。

私は税をもっと多くの子供のために使ってほしいと思う。インドで暮らしていた時、休日の朝によくホテルのビュッフェに行っていた。そこでは十二歳以下の子どもは無料で、子どもが騒いでも店員も客もみんなニコニコしていた。発展途上国なのに、子どもを大切にする雰囲気にあふれていた。

一方で、先進国である日本では、電車で子どもが騒げば白い目で見られ、公園でボール遊びをすることも禁じられている。小学校のときのバスケでは、校庭とは逆側の窓は騒音になると言われ、開けることができなかった。このような子どもが息苦しい社会を変えてほしい。子どもに優しい国に変えるために税が果たす役割があるのではないかと思う。

一人の大人として社会に出るようになったら、税と直接関わる機会が増えるだろう。税金を納める立場になった時、その使い道や必要性にしっかりと耳を傾け、理解を深めていければと思っている。